


 書評

八木剛平 著

現代精神医学定説批判 ネオヒポクラティズムの展望

加藤 敏

かつて日本を代表する評論家小林秀雄は、科学的技術知の目覚ましい進歩に引き換え、人間の人格、また知恵は全く成長しておらず、かえって、思想が浅薄になっていることを憂えた。計量化と視覚化をなよりの通路とする科学的アプローチが産業社会の市場原理と対になってますます大きな力を持ちだしている今日、この評論家の憂えはいっそう大きくなっている観を禁じ得ない。「実に浅薄ですよ、このごろの知識人は」という小林秀雄のきびしい批判の言葉は、今日、精神医学の分野で論文を書き、講演で話す「知識人」の多くにもあてはまることは間違いないだろう。評者自身、「これでいいのか？」と内心忸怩たる思いにかられることがある。グローバリゼーションの時代に入り、はなはだ遺憾ながらとりわけわが国では、批判精神がひどく衰弱してしまったように思う。

その意味で本書は時宜に即した待望の本格的な批判の書であり、特筆に値する。もともと生物学的精神医学を専門とする著者によって、こうした現代精神医学の「軽薄な」思考、あるいは「怠慢な解決」(A.アルト)を正面に見据えてその不備を鋭く突き、ラディカルかつ建設的な考え方が提出されているだけに、説得力がある。前著『精神分裂病の薬物治療学』で提唱されたネオヒポクラティズムの視点を発展させ、生物精神医学で「定説」と喧伝されているいくつかの代表的な知見を取り上げ、しかるべき自己治癒の機制が作動していることを尊重する「回復論的治療観」のもとにあらたな解釈を施し、薬物療法、ひいては精神科治療全般に対してあらたな展望を拓く。著者の回復論的治療の導きの糸となる概念は、フランスの外科医ラボリによって発見された外科的なショック後の解体と再生の間を振動する「侵襲後振動反応」である。この考え方を援用して、脳内ドパミンは、統合失調症の防御または修復に関与する侵

襲後振動反応とみなせるシステムであるという魅力的な説が打ち出される。さらに、うつ病についても回復モデルから考察し、セロトニンをはじめとしたモノアミンは回復因子と把握される。

こうした論点にうかがえるように、今日「定説」となっている生物学的精神医学の考え方を180度覆すような指摘が多数なされている。しかもそこでは、中井久夫氏の寛解過程論や神田橋條治氏の養生論、故宮本忠雄の自己治癒論など日本の精神病理学者による学説が随所で援用され、生物学的精神医学と精神病理学の橋渡しがなされている。その意味では、本書は日本発の「精神薬理・病理学」の研究書であり、わが国の精神医学のレベルの高さを示すものといえる。この局地的知(local knowledge)が普遍的知(universal knowledge)となることを切に願いたい。

評者は、精神病理学の見地から、DSMに代表される操作的診断体系と脳科学のアプローチの両輪で進められる現代精神医学に対する脱構築の試みをささやかながら進めている(たとえば『統合失調症の語りと傾聴—EBMからNBMへ』、金剛出版、2004)。本書のライトモチーフである「回復論的治療論」は、「ソフトな内閉相を尊重しつつソフトな裂開相へ」患者を導くよう心がけるといった評者の治療指針と響きあうところが少なくなく、個人的にも大変おもしろく読ませていただいた。医学情報が氾濫するなか、ますます臨床実践において要請される地についた批判精神を培う上でも、わかりやすさを目玉とする近頃のマニュアル本とは好対照をなす、重厚な「八木精神薬理・病理学」の書をぜひ、ひとといていただきたい。

(自治医科大学精神医学教室)

●B5変型判 202頁 2005 定価5,985円(本体5,700円+税) 金原出版

■ 訂正とお詫び ■

本誌 48 巻 5 号(2006 年 5 月号), 表紙および 581 頁「書評」欄の書籍タイトルに以下の誤りがありました。訂正し, お詫び致します。

(誤) 「現代精神医学定説批判 ネオヒポクラティズムの展望」

(正) 「現代精神医学定説批判 ネオヒポクラティズムの眺望」

『精神医学』編集室